

[052]政治研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/16436>

出版情報：政治研究. 52, 2005-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

「戦う平和論者」 具島兼三郎先生を偲んで

石川 捷 治

九州大学名誉教授具島兼三郎（ぐしまかねさぶろう）先生は、二〇〇四年（平成一六年）十一月二日、九九歳の天寿を全うされた。先生は戦前・戦後を通じて、政治学者として反戦、反ファシズム、民主主義のために飽くなき実践を続けられた「戦う平和論者」（一九四八年、大雅堂から出版された書名——後掲「業績」参照）であった。

一九〇五年（明治三八年）福岡に生まれた先生は、大正デモクラシーのなか、何のために学問をするのかを自ら厳しく問う青年時代をすごされた。親代わりであり福岡におけるキリスト教婦人矯風会のリーダーで廃娼運動の先頭に立たれていた溝口敏子病院長夫人から「人の病気をみる医者ではなく、社会や国家の病気を治す医者に」というアドバイスをうけ、旧制第五高等学校理科より当時新設された九州帝国大学法文学部へと方向転換された。折りからファシズムへの道を突き進みつつあった日本。その国家・社会の「病氣」に社会科学のメスを入れることになる。先生は、二八年（昭和三年）卒業（第一回生）と同時に九大助手に就任されるが、卒業前からファシズム研究に着手されていた。三二年同志社大学法学部に転じられるが、『ファシスト国家論』（三三年）、『ファシズム独裁と労働統制——協調組合国家の研究——』（三四年）をはじめ、論文を含めて十数本を次々に発表した。それらは主としてイタリア・ファシズムの研究であり、日本におけるファシズムを批判的に検討する視座と理論を提示するという当時の実践的問題意識によって貫かれていた。その研究ゆえ、同志社大学を辞めざるをえなくなるが、先生の研究は当時の国際的な学会

はもとより今日の比較ファシズム論の水準からみても高く評価されるべきだと考える。とくに「漸進的な」「ファビオ（持久的な）」ファシズムの分析を中心とする研究は、国家構成原理の転換を含む独自の政治形態としてのファシズムに関する国家論的研究の先駆的開拓者たる位置を占めている。

しかし戦後日本のファシズム研究において、この具島ファシズム論の意義づけは十分にはなされていない。実は戦後、具島先生の岩波新書『ファシズム』（四九年）があまりに大きな反響を呼んだために、専門研究者の間でさえ、具島ファシズム論といえば、この本の研究に凝集されているはずとの思い込みがあった。また、先生ご自身の過去をふりかえるよりも常に前へ前へ進むという姿勢も、戦前の先生の研究が参照されなかつた要因になつたと思われる。だが最近、若手研究者を中心として戦前の具島ファシズム論を再検討する動きが始まつたことは喜ばしい限りである。（その一例として、熊野直樹「具島ファシズム論の再検討」『法政研究』第七一卷第四号、二〇〇五年三月刊、所収）がある。

その後、具島先生は、南満州鉄道株式会社（満鉄）調査部に籍を置き、研究を続けられた。満鉄時代、「日独伊三国同盟」反対の論陣を張つたため、四二年（昭和一七年）九月関東軍憲兵隊に拘禁され、二年半獄中生活の辛酸をなめつくされた。

戦後は読売新聞論説委員として健筆を振るわれた後、四八年（昭和二三年）三月九州大学法学部教授に就任、六九年（昭和四四年）三月まで本学で教鞭を執られた。本学名誉教授となられたのち、七四年一〇月から八〇年一〇月まで長崎大学学長。その後も八五年（昭和六〇年）六月まで長崎総合科学大学平和文化研究所長を務められた。

戦前のファシズム研究にはじまり、中国・ソ連・欧州を中心とする国際情勢分析、戦後はアジアの民族運動、中国革命、現代の植民地主義、安保問題、核・平和問題など、先生はその時期における最も緊要な課題の研究に全力を傾けられた。

具島先生の政治学の特徴は、まず第一に、現実と格闘し常に新しいテーマの研究へと前進されたことである。そし

て何のために学問をするのかを自ら問い続けられたのである。

第二には、研究における具体的データに基づく科学的分析と冷徹な論理である。満鉄時代の論文「物資戦略と外交政策」や主導的に参加された「支那抗戦力調査」にもその特徴がいかなく発揮されている。それは表層的なイデオロギーや方法論ではなかったため、自らの研究成果へのゆるがぬ確信につながった。多数の転向者が出るなか、獄中においても節を通しえたのはまさにその力であったように思われる。

第三には、研究の成果を市民や労働者へ還元するという姿勢である。先生は求められればどこにでも足を運ばれた。そして、朗朗とした大きな声とジェスチャーを交えた「具島節」で人々を魅了した。先生が労をいとわず人々に語りかけられたのは、個人のインテリがいくら優れた論文を書いてもファシズムと戦争を阻止できなかったという戦中の体験から、学問と市民・労働者が結びつくことによってはじめて社会的な力となるとお考えからであった。

具島先生は研究室だけでなく市民のなかにも積極的にはいられた。勤労者学習運動、原水爆禁止運動、平和運動とともに革新統一運動においてもシンボルの存在であった。八三年（昭和五八年）福岡県で遅咲きの革新統一（最後の段階の「革新自治体」）が実現したのも先生抜きには考えられなかった。

具島先生は歴史の節目々々において、研究を通じて警鐘を鳴らし、それゆえに迫害をこうむられたこともたびたびだった。しかしその主張の正しさはのちに歴史によって証明された。その意味では、先生はまさに日本現代史の証人といえよう。市民に傍観者ではなく、歴史の主体者、創造者であれと説く政治学者は多いが、その歴史の修羅場に自らの身を置いた人はきわめて少ない。先生はその稀有なお一人であった。「戦う平和論者」と自他ともに呼ばれる所以であった。誰でもそのようになれるわけではないが、今日においても具島先生の時代と格闘された批判的精神ならびに研究態度を少しでも継承したいと念じている。

（いしかわしろうじ・九州大学大学院法学研究院教授、九州大学政治研究会会長）

具島兼三郎九州大学名誉教授 略歴・業績

〔略歴〕

一九〇五年一月五日、福岡市桶屋町（現上呉服町）にて生まれる。福岡県立福岡中学校、熊本第五高等学校を経て、九州帝国大学法文学部に入學。二八年に同学部卒業、助手に就任。三一年に同志社大学法学部で講師、翌三二年からは助教として勤務。しかし三七年、国民精神文化研究所への内地留学を拒み辞職。大連の南滿州鉄道株式会社（調査部）へ。四二年、日独伊三国軍事同盟の有害無益を説き、関東軍憲兵隊に拘禁される。四四年一月、保釈。五月、執行猶予判決。終戦を前に内地へ帰還。大分県の豊後高田に疎開する。

終戦後まもなく上京、再び文筆活動へ。四七年、読売新聞社論説委員。法政大学講師、九州大学非常勤講師を兼任。四八年、九州大学法学部教授に就任。五二年、法学博士号取得。五五年、五九年の二度、九州大学法学部

長、六五年、九州大学産業労働研究所長。六九年三月退官、名誉教授号授与。七四年には長崎大学学長、八〇年には長崎総合科学大学・長崎平和文化研究所長、八五年には同研究所名誉所長となる。

また、日本学術会議会員をはじめ日本国際政治学会、日本政治学会、アジア政経学会の理事などを歴任。一方で、戦後の反戦・反核運動等にも深く関与。「大衆とともに」歩む。

二〇〇四年一月一二日、永眠。翌月一八日の九州大学での追悼集会では、多くの人が別れを惜しんだ。

〔主要業績目録〕

I 著書

- ・『ファッシスト國家論』千倉書房、一九三三年。
- ・『ファッシズム獨裁と労働統制―協同組合國家の研究

究』政経書院、一九三四年。

・今中次磨氏との共著『ファシズム論』〈唯物論全書〉三笠書房、一九三五年。

・〔翻訳〕エフ・エルマート『ナチス準戦時國家体制』千倉書房、一九三七年。

・『世界政治と支那事變』白揚社、一九四〇年。

・中国研究所編『中日戦争と國際情勢』実業之日本社〈中國新書〉、一九四八年。

・『アジアの變貌』時論社、一九四八年。

・『戦う平和論者』大雅堂、一九四八年。

・『ファシズム』岩波書店〈岩波新書 青版二〉、一九四九年。

・『インドシナの民族革命』〈潮流講座經濟学全集 第二部 世界經濟の現状分析〉潮流社、一九四九年。

・『ファシズム獨裁と労働統制〔改訂版〕』大雅堂、一九四九年。

・『中國とソ連―中ソ關係三十年史―』弘文堂〈アテネ文庫 一〇九〉、一九五〇年。

・『激變するアジア』岩波書店〈岩波新書 青版一二三〉、

一九五三年。

・『現代の植民地主義』岩波書店〈岩波新書 青版三一七〉、一九五八年。

・GUDZIMA Kanesaburo, *Sovremennyi Kolonializm*, Moskva, 1960. (ロシア語版『現代の植民地主義』モスクワ国立外国文献出版局、一九六〇年。)

・『現代の國際政治』岩波書店、一九六五年。

・『アジアとヒューマニズム』〈現代ヒューマニズム講座 第三卷〉宝文館出版、一九六九年。

・『反安保の論理―七〇年代闘争の視点―』三一書房〈三一新書 六七八〉、一九六九年。

・『國際政治―國際情勢を理解するための基礎知識―』評論社〈評論社の教養叢書 一九〉、一九七〇年。

・『東アジアの國際政治―戦前・戦後の構造と展開―』評論社〈評論社の教養叢書 二四〉、一九七一年。

・『現代のファシズム』青木書店〈青木新書 一五五〉、一九七二年。

・『近代日本外交小史―日本外交の足跡と展望―』評論社〈評論社の教養叢書 三一〉、一九七二年。

- ・『現代国際政治史―冷戦構造の発展と崩壊―』評論社
 〈評論社の教養叢書 三四〉、一九七四年。
- ・『幕末外交史余話―エピソードが照らす史実の側面―』評論社〈評論社の教養叢書 三八〉、一九七四年。
- ・飯島宗一、具島兼三郎、吉野源三郎編『核廃絶か破滅か―被爆三〇年広島国際フォーラムの記録―』時事通信社〈市民の学術双書 一五〉、一九七六年。
- ・『流れの底に真実は光る―具島学長の「昭和史」―』ながさき放送セミナ―、一九七七年。
- ・『どん底のたたかい―わたしの満鉄時代―』九州大学出版会、一九八〇年。
- ・〔随筆集〕『息子と老妻』ながさき放送セミナ―、一九八〇年。
- ・『奔流―わたしの歩いた道―』九州大学出版会、一九八一年。
- ・『文明への脱皮―明治初期日本の寸描―』九州大学出版会、一九八三年。
- ・長崎総合科学大学平和文化研究所編『ナガサキ―一九四五年八月九日―』岩波書店〈岩波ジュニア新書 七

九〉、一九八四年。

- ・『全面核戦争と広島・長崎』岩波書店〈岩波ブックレット 三五〉、一九八四年。

ト三三、一九八四年。

・〔随筆集〕『さつま芋』ながさき放送セミナ―、一九八六年。

- ・今中次麿との共著『ファシズム論〔復刻版〕』久山社、一九九〇年。

・『近世日本外交史』黎明社、出版年不明（九州大学法学部図書室蔵）。

II 主要論文（論説・書評・翻訳・紹介など）

- ・「所謂『文化科学方法論』における嚮導概念の問題―特に政治学、法律学及び法理学の問題に關聯して―」『同志社論叢』第三五号、一九三一年。
- ・「中間的社會層の政黨學說」『同志社論叢』第三六号、一九三一年。
- ・〔翻訳〕「伊太利に於けるファシスト組合法（一）」『同志社論叢』第三七号、一九三二年。
- ・〔翻訳〕「ファシスト労働組合法施行法」『同志社論叢』第三八号、一九三二年。

- ・「ファツシヨ獨裁の法理―ロッコの所説を中心として―」『同志社論叢』第三九号、一九三二年。
- ・「伊太利に於けるファツシスト労働組合の法律的構成」(一)(二)『批判』第三卷第四一五号、一九三二年。
- ・「ファツシスト労働裁判所論―階級的自己防衛の禁止―」『批判』第三卷第八号、一九三二年。
- ・「機械論的ファツシズム論を嗤ふ―篠村敏氏を駁す―」『批判』第三卷第一一号、一九三二年。
- ・「ファツシスト國家の政治機構(上)(下)―特にイタリーについて―」『社会政策時報』一五八―九号、一九三三年。
- ・「ファツシヨ獨裁下の團體労働協約」『同志社論叢』第四五号、一九三四年。
- ・「ダヌンツィオのカルナロ憲法とファツシスト組合國家」『國家學會雜誌』第四八卷第一号、一九三四年。
- ・「團體協約に於ける二個の獨裁」『公法雜誌』第一卷第三号、一九三五年。
- ・「國家・國民・ファツシズム」『公法雜誌』第一卷第七号、一九三五年。
- ・「ナチス國民的労働秩序論」『同志社論叢』第四八号、一九三五年。
- ・「ナチス身分秩序の構造(上)(下)―ファツシズム組合協同體國家との比較研究―」『社会政策時報』第一八一―二号、一九三五年。
- ・「ファツシズム労働秩序論―ナチス労働秩序との比較研究―」『社会政策時報』一八六号、一九三六年。
- ・「國家總動員」『經濟學辭典(追補)岩波書店』、一九三六年。
- ・「組合協同體國家の改造」『公法雜誌』第二卷第一号、一九三六年。
- ・「英國に於ける組合協同體國家論」『公法雜誌』第二卷第五号、一九三六年。
- ・「英國ファツシズムと組合協同體國家(一)(二)」『國家學會雜誌』第五〇卷第六―七号、一九三六年。
- ・「ファビオ・ファツシズム其他」『公法雜誌』第二卷第一一―号、一九三六年。
- ・「翻訳」『現代資本主義の進化』(デヴィス)資本主義とその文化(一)『同志社論叢』第五二号、一九三六年。

- ・〔翻訳〕「資本主義的生産」(デヴィス『資本主義とその文化』(二))『同志社論叢』第五三号、一九三六年。
- ・〔翻訳〕「金融と銀行家」(デヴィス『資本主義とその文化』(三))『同志社論叢』第五四号、一九三六年。
- ・〔書評〕「小野清一郎『法理學的普遍主義』」『法律時報』第八卷第二号、一九三六年。
- ・〔書評〕「大岩誠『最近の協調組合主義思潮』」『法律時報』第八卷第七号、一九三六年。
- ・〔書評〕「清宮四郎『指導者國家と權力分立』」『法律時報』第八卷第九号、一九三六年。
- ・〔書評〕「南原繁『プラトーン復興と現代國家哲學の問題』」『法律時報』第八卷第一一号、一九三六年。
- ・「ナチス勞働法』について」『公法雜誌』第三卷第三号、一九三七年。
- ・〔翻訳〕「デヴィス『資本主義とその文化』(四)——株式取引所および投資信託——」『同志社論叢』第五五号、一九三七年。
- ・〔書評〕「長濱政壽『政黨とファッシズム獨裁』」『法律時報』第九卷第一号、一九三七年。
- ・「ファッシズム治下における選舉制度の變遷」『法律時報』第九卷第六号、一九三七年。
- ・「イタリー經濟最近の動向」『滿鉄調査月報』第一七卷第一一号、一九三七年。
- ・「列強の狀勢と我が大陸政策の進路」『改造』七月号、一九三八年。
- ・「ソ聯と國防勞働戰線」『改造』九月号、一九三八年。
- ・「最近の英ソ關係」『滿鉄調査月報』第一八卷第二号、一九三八年。
- ・「支那事變を中心とする國際情勢の變遷」(一)(二)『滿鉄調査月報』第一八卷第五号、第一九卷第三号、一九三八年。
- ・「極東外交を中心として見た英國々内政局——特にイギリス外相辭職後の政情に就て——」『滿鉄調査月報』第一八卷第一〇号、一九三八年。
- ・「英國の外交と國內政局(上)(下)」『滿洲評論』第一五卷第一五号——第一六号、一九三八年。
- ・「英國の外交と國際情勢(一)(二)(三)(四)」『滿洲評論』第一七卷第三一六号、一九三九年。

・「物資戦略と外交政策―特に我國を中心として―」『滿

鉄調査月報』第一九卷、一九三九年。

・「東亜の新情勢とソ連邦」『改造』三月号、一九四〇年。

・「物資戦略と外交政策(補遺)」『滿鉄調査月報』第二〇卷第一号、一九四〇年。

・「歐洲戦局の進展と極東ミュンヘン」『中央公論』第六三四号、一九四〇年。

・「世界變局とソ連邦」『中央公論』第六三六号、一九四〇年。

・「三國同盟と日ソ關係」『改造』十一月号、一九四〇年。

・「列國極東政策の動向」『支那經濟年報(昭和一五年版)』、一九四〇年。

・「列國對支經濟援助の研究」『中央公論』第六四一号、一九四一年。

・「ソ聯極東政策の現段階」『中央公論』第六四四号、一九四一年。

・「侵略戦争の主體 日本ファツシズムの特質」『言論』創刊号、一九四六年。

・「國際聯合と米英ソ外交」『世界評論』四月号、一九四

六年。

・「中國統一と米ソ關係」『世界評論』五月号、一九四六年。

・「中國統一問題とアメリカ」『言論』三月号、一九四六年。

・「終戦後におけるソ聯世界政策の基調」『時論』第一卷第六号、一九四六年。

・「國民政府の危機とその強化」『世界』第二三号、一九四七年。

・「インドの独立と國內政局」『青年文化』第二卷第一二号、一九四六年。

・「中國内戦の新展開」『時論』第二卷第八号、一九四七年。

・「イタリアと中國」『中央公論』第七一二号、一九四八年。

・「みんなして平和を守ろう」『青年文化』第三卷第六号、一九四八年。

・「軍服―平和主義者の手記―」『青年文化』第三卷第七号、一九四八年。

- ・「アジアは何故変ったか」『世界』第三四号、一九四八年。
- ・「反戦論者の手記―検察官のあたま―」『われらの世界』第三卷第一号、一九四八年。
- ・「東京裁判の歴史的意義」『歴史評論』第三卷第六号、一九四八年。
- ・「中國革命の影響」『時論』第四卷第三号、一九四九年。
- ・「東南アジアの波紋」『中央公論』第七二二号、一九四九年。
- ・「中國革命における戦略戦術の發展」『政治學研究第三集』実業之日本社、一九四九年。
- ・「新中國とソ連」『資本主義の中國侵入史』『現代中國辭典』、一九五〇年。
- ・「中日戦争時代の中ソ關係」『法政研究』第一七卷合併号、一九五〇年。
- ・「戦後のアジア」研究序説』『法政研究』第一八卷第二号、一九五〇年。
- ・「中ソ同盟論」『法學志林』第四八卷第一号、一九五〇年。
- ・「ビルマ獨立論（上）（中）（下）―太平洋戦争によるビルマの政治的变化について―」『法政研究』第一九卷第二一四号、一九五二―二年。
- ・「人民民主主義」『近代社會の構造と危機』〈社會科學講座 第五卷〉弘文堂、一九五一年。
- ・「植民地管理方式の史的發展」『法律時報』第二四卷第七号、一九五二年。
- ・「條約改正と初期議會」『近代篇（二）』〈日本歴史講座 第六卷〉河出書房、一九五三年。
- ・「民族運動に對するブルジョアの指導の限界―アジアの植民地および半植民地を中心として―」『法政研究』第二〇卷第二一四合併号、一九五三年。
- ・「イタリア・ファシズムの政治組織」『民族問題』「中國共產党」『中日戦争』「組合国家」『ムッソリーニ』「軍事基地」『政治學事典』平凡社、一九五四年。
- ・「從属国家の本質と形態」『現代日本国家の構造』〈政治經濟基礎講座 第三卷〉岩崎書店、一九五四年。
- ・「中国における日米争覇戦―第一次世界大戦からワシントン會議まで―」『法政研究』第二二卷第一号、一九五〇年。

五四年。

・「原子力と米ソ両国の立場」『法政研究』第二二卷第二—四合併号、一九五五年。

・「植民地解放運動—戦略戦術の発展を中心として—」

「原子力と政治—原子力の平和的利用の問題を中心として—」『政治史(下)』〈政治学講座 第六卷〉理論社、一九五五年。

・「隷従への反抗—朝鮮、ヴェトナムの闘い—」『世界の社会主義』〈社会主義講座 第六卷〉河出書房、一九五六年。

・「アジアにおける植民主義の後退」『産業労働研究所報』第一四号、一九五七年。

・「ナシヨナリズムの歴史的変遷」『政治研究』第五号、一九五七年。

・「安保条約をめぐる諸問題」『展望』(九州大学学友会)創刊号、一九五七年。

・「南ヴェトナムにおける米佛勢力の交代」『法政研究』第二四卷第一号、一九五七年。

・「紹介」『植民主義に関する二つの文献』『法政研究』

第二四卷第三号、一九五七年。

・「墓穴を掘ったフランスのインドシナ統治」『法と政治の研究—九大法学部三〇周年記念論文集—』有斐閣、一九五七年。

・「植民主義の前進を阻む諸条件」『政治研究』第六号、一九五八年。

・「ブルジョア民主主義の腐蝕過程」『小岩井浄氏記念論文集』、一九五八年。

・「フランス植民主義の敗退」『展望』(九州大学学友会) 第三号、一九五八年。

・「国際政治における大衆の登場」『法政研究』第二五卷第二—四合併号、一九五九年。

・「原子力と戦争と平和」『国際政治』、一九五八年。

・「第二次世界大戦後の国際紛争」『国際政治』、一九五八年。

・「科学技術の進歩と国際政治」『法政研究』第二六卷第三号、一九六〇年。

・「独仏提携の経済的背景」『法政研究』第二七卷第二—四合併号、一九六一年。

- ・「日中関係と国際情勢」「国際政治」、一九六一年。
- ・「ユーラフリカ計画と集团的植民地主義」「法政研究」第二一八卷第二号、一九六二年。
- ・「平和共存理論における中ソの対立」「法政研究」第三〇卷第三号、一九六三年。
- ・「新植民地主義の諸形態」「産業労働研究所報」第二八・二九号、一九六三年。
- ・「アメリカにおける冷戦政策の変遷」「法政研究」第二九卷一―三合併号、一九六三年。
- ・「社会主義諸国の後進国援助」「産業労働研究所報」第三二二号、一九六四年。
- ・「国連の過去と現在」「法政研究」第三一卷第二号、一九六四年。
- ・「軍縮交渉における問題点の推移」「政治研究」第一三三号、一九六五年。
- ・「インドシナ戦争の終結(上)」「産業労働研究所報」第三七号、一九六六年。
- ・「中共外交の背景」「歴史教育」第一四卷第二号、一九六六年。
- ・「社会主義社会の階級斗争―中国における新理論の形成―」「法政研究」第三四卷第三号、一九六八年。
- ・「外援篇」へ支那抗戦力調査委員会 昭和十四年度総括資料(五)(第十分冊分)『満鉄調査部編』支那抗戦力調査報告(復刻版)』三一書房、一九七〇年。
- ・「核時代の権力政治―戦争と平和の問題を中心として―」「政治研究」第一七号、一九六九年。
- ・「中国文化大革命への道(一)(二)(三)」「法政研究」第三五卷第五―六号、第三六卷第一号、一九六九―七〇年。
- ・「現代ファシズムの特質」「現代と思想」第五号、一九七一年。
- ・「林彪の失脚と今日の中国」「日中文化協ニュース」増刊号、一九七二年。
- ・「日中戦争とイギリス」「国際政治」第七〇号、一九七二年。
- ・「核時代の『力の政治』」「戦争と政治」へ戦争と平和シリーズニシテ雄渾社、一九六八年。
- ・「日本は再びファシショ化するか」「経済評論」第二三

卷第三号、一九七四年。

・「一九三〇年代とわたし」『一九三〇年代危機の国際比較』法律文化社、一九八六年。

・「平和への構築を妨げるもの」『平和文化研究』第四集、一九八一年。

・「緊張の緩和への道——C・オスグット理論の今日的意味——」核兵器による平和は可能か——核抑止力批判——

『平和文化研究』第五集、一九八二年。

・「非核三原則と事前協議」『平和文化研究』第六集、一九八三年。

・「全面核戦争の危機と日本」『平和文化研究』第七集、一九八四年。

・「SDIを考える」『平和文化研究』第八集、一九八五年。

・「激動の八十年——傘寿記念講演記録——」『平和文化研究』第九集、一九八六年。

・「軍事大国化路線への道——経済大国化路線の終焉——」『平和文化研究』第一集、一九八七年。

・「国家秘密法修正案の問題点」『平和文化研究』第一

二集、一九八八年。

・「昭和の天皇制」について『平和文化研究』第二集、一九八九年。

・「東欧の変貌とソ連」『平和文化研究』第二三集、一九〇年。

・「櫻井君と岩波ジュニア新書『ナガサキ』」『平和文化研究』第一四週、一九九一年。

・「新連邦条約からソ連の解体まで」『平和文化研究』第一五集、一九九二年。

【編集委員会注】

目録作成にあたっては、特に次の文献を参照しました。

・「反戦・反ファシズムの五十年」九州法学会、一九七六年。

・「具島兼三郎先生・米寿記念 年譜業績目録」長崎総合科学大学・長崎平和文化研究所、一九九二年。

・「具島兼三郎教授の著書および主要論文目録」『法政研究』第三二卷第二一六合併号（下巻）、一九六六年。